



特集

地域に根ざし60年。

鹿児島県立短期大学

「県短」の魅カ

多くの県民から「県短」と呼ばれ親しまれている鹿児島県立短期大学は今年設立60周年を迎えました。

これまでに送り出した卒業生は13,000人以上。経済、文学、行政などさまざまな分野で活躍する人材を輩出し地域社会の発展に貢献している「県短」の魅力を紹介します。

地域に有用な人材を送り出す

鹿

鹿嶋県立短期大学は、専門の学門を深く研究する

とともに、豊かな教養と職業または実生活に必要な能力をもつ人材を育成することで地域社会に貢献することを目的に、昭和25（1950）年鹿嶋県立大学の短期大学部として開学。その後、鹿嶋県立大学の医学部と工学部が国立鹿嶋県立大学へ移管されたことに伴い、昭和33（1958）年に鹿嶋県立短期大学として独立した。

県短は、当初から夜間の第二部を設置し、勤労者のための高等教育の場としての役割を担ってきた。また、第一部は男女共学の中、女子学生の占める割合が高く、女性の社会での自立に大きな役割を果たしてきたと考えられる。

平成22年4月現在、県短で学ぶ学生は619人。小規模大学であるが、人文、社会、自然科学の総合的な性格を持つ3つの学科があり、少人数教育の長所を生かした学習方式、実体験を通して働くことの意味や社会貢献を考える体験実習科目、就職課程など、多様な教育プログラムにより学びの場を提供している。

学 科 の 紹 介

● 文学科

（日本語日本文学専攻、英語英文学専攻）

文学、言語、文化を学ぶことを通して、豊かな文化的感性、柔軟な思考力、的確な表現力を身につけ、社会で活躍できる人材の育成を目指す。

● 生活科学科

（食物栄養専攻、生活科学専攻）

衣・食・住に加え、広く生活にかかわる事象を研究対象とし、生活の質を高め、豊かな発想をし社会に貢献する人材育成を目指す。

● 商経学科

（経済専攻、経営情報専攻）

世界、日本、地域の仕組みと動きを研究し柔軟な思考力と企画力を鍛え、また情報処理技術の習得により、情報発信能力を育てる。

● 第二部商経学科

県内唯一の夜間高等教育機関。さまざまな職業、年齢の仲間とともに経済・社会、企業経営のあり方、会計処理、情報活用などを学ぶ。



商経学科 学科長・教授

たくち やすあき
田口 康明さん

県短の特徴は、まず授業料が安いことです。これは県立大学の良いところだと思いますね。次に教員一人あたりが受け持つ学生数が非常に少ないこと。商経学科全体の入学定員で単純計算すると、教員一人に対して学生は7～8人程度。恵まれた学習環境だと言えます。

学生について言うと、女子学生が中心となりますが、就職にしても進学にしても県内志向が強いですね。また、教授会を中心として教員主体の学校経営がなされていることも県短の特徴の一つです。

県短の教育方針は、地域に有用な人材を育成すること。また、高等教育の機会を提供する重要な役割を担っています。

私は鹿嶋島に来て、一般向けの公民館講座や図書館での金曜講演会の受講生の多さに驚きました。県民の学習ニーズは掘り起こせばたくさんある。それらに応えていくことが県短の使命だと思います。



学生たちには、いろいろな本を読んだり、先生と話をし、県短での学生時代に幅広い教養を身につけてほしいと思います。



「このゼミを通して、何か問題が起こったときに助け合える友人関係、人間関係を作れる人になってほしい」と語る朝日教授。

【小規模学習方式】

疑問に感じたことを追求します！

商経学科 教授
あさひ よしたろう
朝日 吉太郎さん

朝 日吉太郎教授のゼミのテーマは、疑問を追求すること。疑問を持ち、それを追求し解決するという講義が討論形式で進められている。

「ゼミは、一つの答えを見つけるところではなく、いろいろなことに疑問を持ち、意見を交わ

しながら、自分なりの答えを導き出すところ。結局、同じ答えになったとしても、その答えに行き着くまでの流れが大切」と語る。「疑問を持つことによって、普段当たり前と思っていることの先に新しい発見があったり、他人の考えを理解することによって、さまざまな考えを学び、気配り、目配りという社会人として大切なことを身につけることができるんじゃないかな」と朝日教授。学生から「先生の影響で考えが変わりました」と言われるときが、教育者みよりに尽きる瞬間だそうだ。



ゼミ生
おばら まりか
小原 茉莉花さん

人前で自分の意見を言えるようになりたいという思いから討論形式の朝日ゼミを選択しました。最初のうちは、慣れずに戸惑うことも多かったのですが、半年経った今では自分の考えを人前で話すことにも慣れてきました。ゼミでは、よい仲間にも恵まれ有意義な時間を過ごしています。ゼミ合宿も楽しかったですよ。就職支援対策の講義も盛り込まれた、昨年12月の霧島合宿は、いい思い出になりました。

「ゼミで学んだことを、これから挑む就職活動にも役立てたい」と話す小原さん。

【体験実習】

体験実習科目

中国へ行ってきました！

平成21年度異文化体験(中国)参加者

こうげ あゆみ
高下 亜弓さん



「留学することは楽しみだが、心残りは、同級生のみなどと一緒に卒業できないこと」と話す高下さん。

入 学を決めたのは、文学部のある短大への進学を希望していたから。県短の異文化体験については、高校生の頃から知っていたし、入学したら

今は、まだ漠然としているが、将来は、中国語に携わるような仕事があったらと考えている。語ってくれた。

絶対に参加したいと思っていたんです。行くなら、絶対に言葉に興味がある中国と決めました」と元気に話すのは、昨年の夏に2週間、南京での異文化体験に参加した文学科2年の高下亜弓さん(20歳)。「出発前は、不安もあったのですが、現地の方々が温かく迎えてくださって、とても充実した2週間でした。今年の8月から来年の6月まで、南京農業大学へ留学する予定です」と